西王母と八仙人

国内最大の中国庭園・燕趙園に慶祝の象徴

◆不老長寿
◆富　貴
◆人望福徳

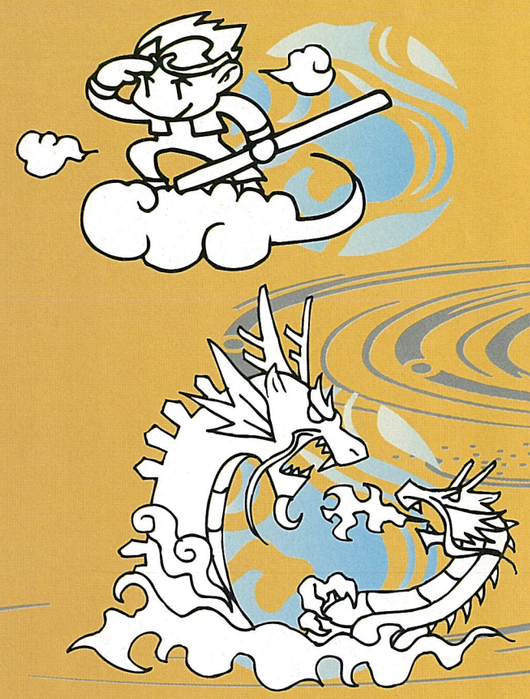
「蟠桃会」と「八仙過海」のあらすじ

3月3日、西王母の誕生日を祝う「蟠桃会（ばんとうえ）」。八仙人が到着すると、西王母は歓喜をあらわにし、神仙達も人間世界で最も人気のある八仙がどのような姿か見ようと一様に門を顧みました。老いも若きもあり、将官も書生もおり、なんと、奇妙な一団でしょう。ざわめく神仙達を八仙人は気にも留めることなく、西王母に珍宝を献じ、歌い、踊ってみせ、西王母を喜ばせました。

八仙は、帰路、東海までやってくると、ただ船で渡ったのでは面白くないということになり、それぞれの宝物に乗って渡海する事にしました。ところが、これらの宝物によって海が熱せられてしまい、怒った東海竜王は、韓湘子を誘拐したので、仙人と水族との一大戦争が始まってしまいました。八仙が竜宮に向かっていることを知った東海竜王は弟の助けを求めて反撃します。東海竜王は正体を海原に現し、大きな口をあけ、仙人を襲います。李鉄拐は、杖を巨龍に代え、口から吐き出す火炎で竜宮を火の海と化します。エビの兵隊、カニの将軍たちは、逃げだします。他の仙人たちも、得意技を披露して戦い、しだいに水族は敗色濃厚となります。

竜王は、「理由も無く八仙人が竜宮城に攻めてきた」と玉帝に訴えました。怒った玉帝は三国志の英雄である関雲長(かんうんちょう)、趙子竜(ちょうしりゅう)、馬超(ばちょう)を元帥として天兵の大群を派遣しました。そこで八仙人も孫悟空を味方にして一大決戦となってしまいます。観音菩薩の仲裁もあり、敗戦確実となった竜王は、やむなく、八仙を竜宮に迎え、頭を深くたれて罪を認めます。

この時から、「八仙過海、各顕神通（八仙海を過ぐるに各（おのおの）神通を顕わす）」という故事ができました。「おのおのが自分の得意分野で全力を尽くす」という意味の諺として使われています。



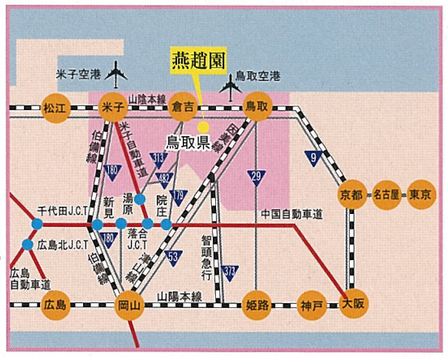
鳥取県　えんちょうえん
燕趙園

中国庭園・鳥取県
燕趙園
http://www.encho-en.com
〒689-0715 鳥取県東伯郡湯梨浜町引地565-1
TEL.0858-32-2180　FAX.0858-32-2185

入園料

大人（個人）	500円	小人（個人）	200円
大人（団体10名以上）	450円	小人（団体10名以上）	180円
大人（団体20名以上）	400円	小人（団体20名以上）	160円
学校行事（高校生）	200円	学校行事（小中学生）	80円

■燕趙園友の会は年会費大人2,500円、小人1,000円で入園料が1年間無料になります。
■障害者の方は個人・団体、大人・小人を問わず無料です。
■開園時間／午前9時～午後5時（7月8月の土・日・祝日は午後8時まで）
■休園日／12月～3月の毎月第4火曜日（祝日の場合は翌日）
■駐車場／乗用車270台、バス27台（無料）



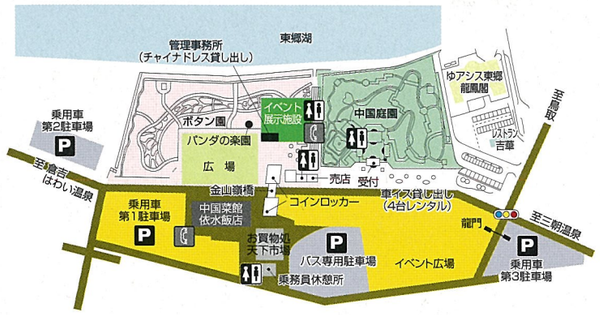
交通アクセス

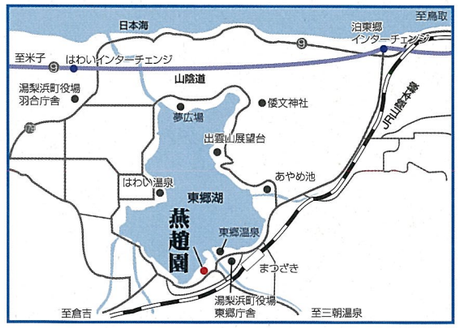
■飛行機
・鳥取空港（ANA・70分）…東京
・鳥取空港（ANA・60分）…名古屋
・米子空港（ANA・75分）…東京
・米子空港（ANA・70分）…名古屋
●鳥取空港着後車で約45分
●米子空港着後車で約90分

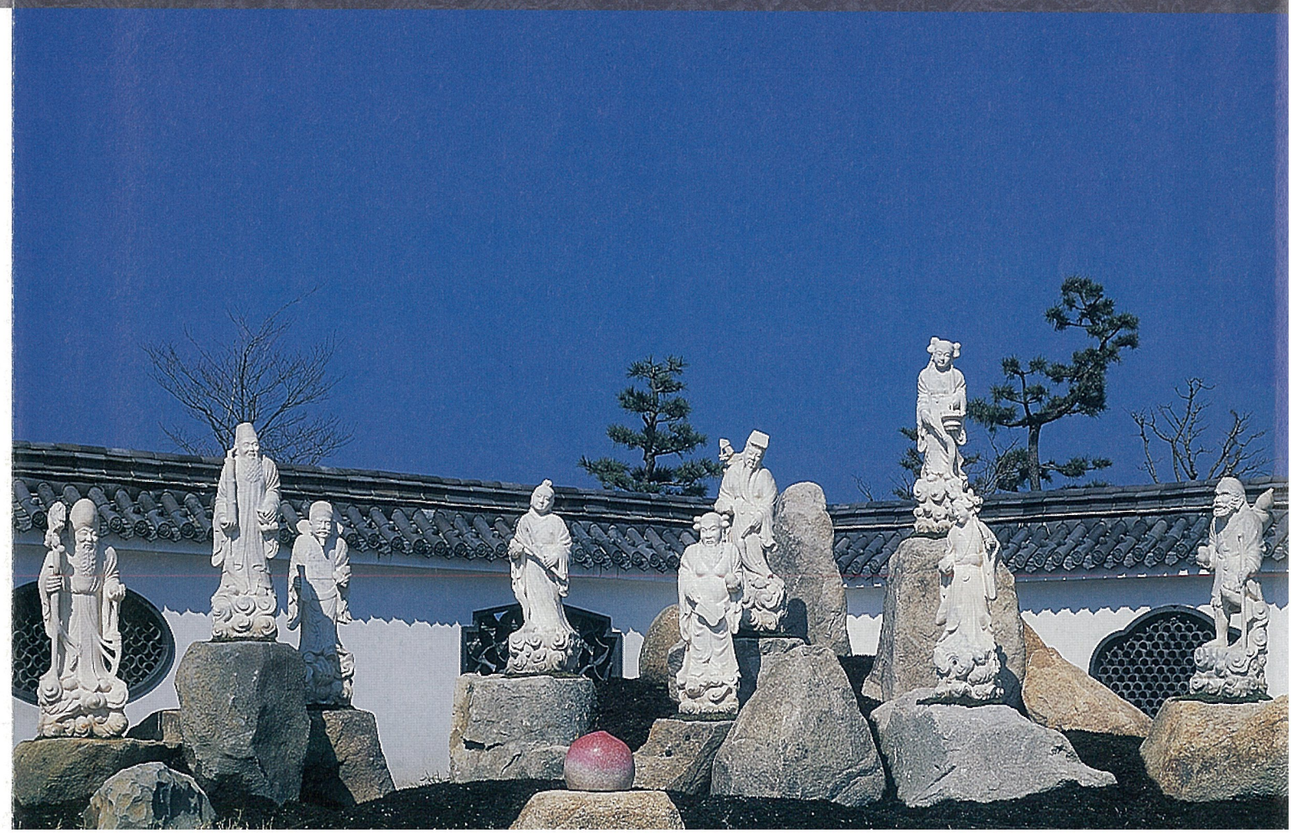
■JR
・松崎駅から徒歩10分
・大阪から特急スーパーはくと号で最速3時間2分、倉吉駅着後車で10分
・岡山から特急スーパーいなば号で鳥取駅まで約1時間40分。鳥取駅から山陰本線で倉吉駅まで約60分。倉吉駅着後車で10分

■車
・大阪から中国自動車道、R179を通り約3時間30分（院庄ICから約1時間20分）
・広島から中国自動車道、米子自動車道、R313を通り約3時間30分（湯原ICから約60分）
・岡山から岡山自動車道、中国自動車道、米子自動車道、R313を通り約2時間30分（湯原ICから約60分）

園内マップ







◆不老長寿
◆富貴
◆人望福徳

西王母と八仙人は、民話の登場人物。中国では、不老長寿、富貴（財運）、人望福徳など慶祝の象徴として人気の高い仙人。日本の七福神のルーツともいわれています。

中国歴代皇帝が想いを馳せた桃源郷に仙人がやって来ました。

西王母と八仙人の石像9体は、大阪市在住の方が購入されたものです。その方が、ご逝去の折、「一番良く似合うところに寄贈してくれ」との遺言があり、ご夫人が寄贈先を求め全国を探され、ここ、燕趙園が最もふさわしいと寄贈されました。

中国の歴代皇帝は中国古代思想の神仙思想をよりどころとし、自らの不老不死を求めて神仙の住む桃源郷を庭園に表現しています。燕趙園は、その歴代皇帝が造園方法とした皇家園林方式の中国庭園であり、神仙思想が息づいています。

中国神仙思想の象徴「西王母と八仙人」の石像9体が燕趙園に来園した事は、必然であったといえましょう。

石像は良質の漢白玉石で彫刻も素晴らしい名品です。

西王母の誕生日は桃の節句の由来。八仙人は七福神になったといわれています。

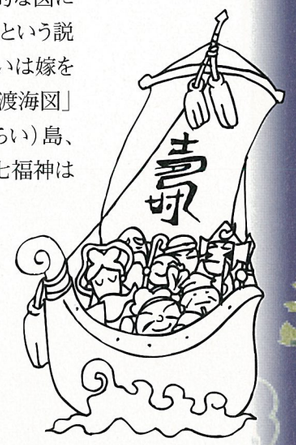
西王母は、長命を得るといわれている王母桃（仙桃）を管理しており、誕生日の3月3日は桃の節句の由来とされています。七福神の代表的な図に「宝船」がありますが、これは中国の「八仙渡海図」が元になったという説が有力です。中国ではお正月にその絵を家の入り口に貼る、あるいは嫁を迎えるときに家の入り口に貼るという習慣がありました。この「八仙渡海図」で、船に乗っているのは八仙。中国ではこの船は東の蓬莱（ほうらい）島、つまり、日本に向かうとされていました。このようなことから、日本の七福神は八仙人が起源になっているとも言われています。

一人足りない七福神

伝承①もともと日本の七福神は中国の八仙人が海を渡っていったもので、一人は舳先で船を操っていたために日本人が勝手に船頭だと思い込んでしまい、八人が七人になった。

伝承②一人少ないのは李鉄拐が良い体を探しに中国にとどまり、船に乗り遅れたから。

伝承③海を渡る際に、一人（誰なのかは不明）が海に投げ出され溺れたため。



西王母と八仙人は、その性格も人間性にあふれ、孫悟空や竜王なども登場する民話がたくさんあります。

1 西王母（せいおうぼ）

西王母は、中国で西の果てにいるとされた仙女で天帝の娘ともされています。月に関わりの深い仙女ですが、太陽神の面もあったようです。すべての女仙たちを統率しています。不老不死の王母桃（仙桃）を管理する、艶やかにして麗しい天の女主人。

2 李鉄拐（りてっかい）

法具：鉄の杖、ひょうたん

一説では東華教主です。ある日、弟子に、自分の魂は華山にいくが、身体は残しておくので絶対に動かしてはいけないと言って出かけていきました。ところが弟子は、鉄拐の身体を焚いて家に帰ってしまいました。帰ってきた鉄拐の魂は、近くに倒れていた者の身体に入ったと言われています。

3 何仙姑（かせんこ）

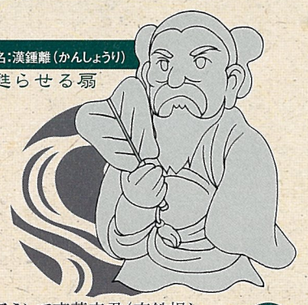
法具：蓮の花、筏籬

一般的には八仙中、唯一の女仙と言われています。14、5歳になったとき、ひとりの仙人が、雲母の粉を食べると身体が軽くなり、不死となることができると教えてくれた夢を見ました。ためしに食べているうちに本当に身体が軽くなりました。そこで、絶対に嫁にいかない決心をしましたが、空を飛び、往来は自由自在になりました。

4 呂洞賓（りょどうひん）

法具：宝剣

廬山で鍾離権に出あい、10回に及ぶ試験を課せられますが無事パスして、天遁の剣法や龍虎金丹の秘法などを授けられます。官職を辞して修行に専念する一方、金丹で病気に苦しむ人を救ったり、貧乏な人に銭を恵んだりして功徳を積んでいます。魔法の宝剣を背負っており、悪鬼・悪霊を退治します。



5 鍾離権（しょうりけん）別名：漢鍾離（かんしょうり）

法具：死者の魂を甦らせる扇

鍾離権は、漢に仕えて左諫議大夫(さかんぎたいふ)にまでなり、漢が亡んだのち、晋に仕え、しばしば兵を率いて戦いました。あるとき、破れてひとりで終南山中に逃げこんだところ、山中で道に迷い、ある隠士（いんし）から南東にいくように教えられたので、その言葉に従うと、東華帝君の住む洞の前にでました。そうして東華帝君（李鉄拐とも言われている）から、おふだ、秘書、金丹の秘訣や悪鬼・悪霊を退治する青竜の剣法など、さまざまな秘文秘法を授けられています。下山後は、多くの霊験をあらわし、呂洞賓に天遁の剣法などの秘儀を伝えて得道させています。

7 曹国舅（そうこくきゅう）

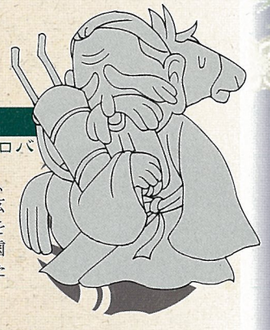
法具：雲陽板（楽器）

曹国舅は、弟が権勢をかさにきて、人びとを苦しめるので諫めましたが、きき入れないので、山中に隠遁し、修行に明け暮れていました。それをみた鍾離権と呂洞賓が、「お前はすでに自分で本来の面目を自得している」と言い、還真の秘旨を授けたうえに神仙の仲間に加えています。

6 韓湘子（かんしょうし）

法具：竹笛

伯父の左遷を「雲は秦嶺に横たわりて家いずくにかある。雪は藍関を擁して馬進まず」の一句に表し予言しています。彼は、八仙のうちで最も若く、竹笛や花かごをもった姿が像に見られます。



8 張果老（ちょうかろう）

法具：道籤（どうろく）魚鼓（楽器）、白いロバ

張果老のロバは、一日に数万里を歩くことができましたが、不必要なときには折りたたむことができました。あるとき、玄宗が白髪で歯もぬけている理由をきくと、即座に髪と歯を抜き、しばらくして、御前にでてきたときには黒い髪と白い歯となっていたそうです。ロバのほか、藍采和から譲り受けた魚鼓という楽器を愛用しています。

9 藍采和（らんさいわ）

法具：拍板（びんささら）、宝蘭の花かご、横笛

藍采和は、いつも、手に約1メートルぐらいの大きな拍板（びんささら）をもち、歌いながら街を歩いて食をもらっていましたから、狂人みたいに見えましたが、じつはその歌のなかには仙道の意味が込められていました。